

みなと元町

タウンニュース

No.
322

発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

令和の幕開けに新たなホテルが3棟

合資会社ゼンクリエイト 根津昌彦

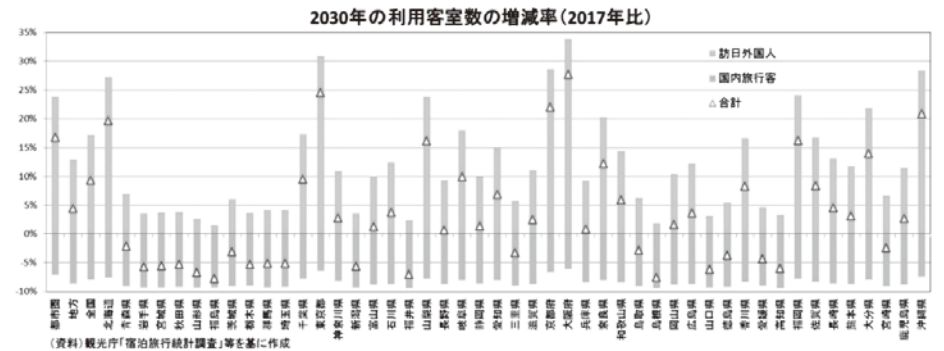
年の各都道府県のホテルの稼働率を予測している。関西圏では、京都が2017年81.7%・2020年95.5%・2030年100.2%、大阪が2017年86.5%・2020年104.1%・2030年111.1%であるのに対して、兵庫は2017年72.4%・2020年75.7%・2030年73.7%と、京都、大阪の稼働率に対して大きく水をあけられそうな予測だ。

もう一つ注目すべき予測は、2017年に対する2030年の利用客室数の増減率である(下図)。国内旅行者は全国どこの都道府県も5%以上の減少に対して、訪日外国人の宿泊によって国内のホテル需要が支えられている様子がよくわかる。兵庫県に注目すると、国内旅行者の減少を訪日外国人で何とかカバーできているのではないかという予測である。

これら3つの予測を単純に考え合わせると、三宮元町のホテルは、今後も客室

数増が見込まれ、2020年には稼働率がピークに近い値まで行くものの、大阪や京都の稼働率には大きく及ばないだけでなく、その後10年間の推移は、大阪や京都が、稼働率増・利用客室数増となるものの、兵庫は稼働率減・利用客室数微増となる。この10年間で、三宮元町という神戸都心が、国内外の宿泊旅行者に対して、訴求力のあるコト、モノを備えたマチへと変貌と遂げなければ、この予測通りとなるだけではなく、この予測すら達成できない可能性もあり得るのである。

宿泊者の需要を喚起するために、宿泊施設自らがマチと積極的に関わりを持ち、マチの魅力を高め滞在したくなる多様なアクティビティを備えることが重要であるといえる。商業者・住民と宿泊施設関係者が対話をする場を持つことからスタートできればと願っている。



(左から)HOTEL meet Me 神戸元町、神戸プラザホテルウェスト、(仮称)ドーミーイン神戸元町

一昨年から昨年にかけて、タウン協エリア内で3つのホテル新築工事に関して、事前協議を行ってきた。3つの案件の中で、先陣を切って今年1月にオープンしたのが、HOTEL meet Me 神戸元町(栄町通3丁目)である。同ホテルは乙仲通り沿い初のホテルとなるが、鉄筋コンクリート造地上10階建・客室数111室で、「神戸の異国情緒あふれる旧居留地の街並みを彷彿とさせる、モダンクラシカルな外観の建物(同ホテルHPより)」が、乙仲通りに仲間入りしたのである。

続いて、現在工事中の案件のうち、今秋オープン予定であるのが、神戸プラザホテルウェスト(元町通3丁目)。パティスリー・グレゴリー・コレ跡地にJR元町駅前の神戸プラザホテルのアネックスとして、鉄骨造地上11階地下1階建・客室数119室のビジネスホテルが誕生する。こちらも、クラシックながら格子状の2階部分がモダンな印象を与える飽きのこないファサードデザインである。

さらに、今年度末には、南京町のりそな銀行跡地で工事中の(仮称)ドーミーイン神戸元町(栄町通2丁目)が、鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造)地上14階建・客室数約300室(予想)という規模で完成する。宿泊者向けの大浴場設備を完備したハイエンド・ビジネスホテルは、グレーを基調に濃淡のコントラストをつけたファサードは、南京町に立地する建物としては異彩を放つ。

こうした、3つのホテルが稼働する1年後には、夕方から翌朝にかけて、みなと元町タウン協議会エリアには、毎日約500～700人の観光客・ビジネスマンが滞在することとなりそうだ。

ニッセイ基礎研究所が今年2月に発表した「都道府県別にみた宿泊施設の稼働率予測」では、2017年、2020年、2030

「元町・夢街道」

書店の話(24)

兵庫県書籍雑誌商組合⑤

岩田 照彦

昭和十一年十一月六日、組合は創立三十周年にあたり神戸商工会議所を会場に記念会を開催した。発足時、県下全域から集まった会員は二十七店舗、三十年を経て五百二十一の会員を擁する組合になっていた。会員を集めた魅力は、どこにあったのか。

組合の活動は、教科書の割引販売阻止活動からはじまった。組合発足時、二十七名の会員が確認したのは組合員間の親睦と営業上の弊害を矯正するため、書籍雑誌の小売は、すべて定価で販売する、と定めたことである。規約が出来ても、実行力がなくては飾り物だ。割引販売の情報は、組合発足に指導的な役割を果たした岸本栄七から得られただろう。名目上、吉岡平助副組長の代理として実質的に活動した柏佐一郎と、岸本栄七のコンビによって定価販売の実績が積み上げられ、正価販売という書店の王道を守る組合として、その知名度を県内各地に広げ、組合員の増加につながっていったことが容易に想像される。

かなり後のことになるが、書店経営がきびしくなっていくなか、既存組合員保護のため、新規開店への条件も規約に盛り込んだ。神戸市内は二丁以内、姫路、尼崎、明石、西宮市の各市は三丁以内、郡町村は五丁以内に outlets するときは同区内の組合員らの署名を添えて

申し込む規則も設け、既設店に配慮するなど業界の安定にも取り組んでいる。販売面では、出版社とタイアップして図書週間や雑誌週間に参加、百貨店には特別な取り扱いをやること、購読者から書籍発行所への直接申し込み勧誘の廃止を訴え、小売店の売上増加につなげた。

組合員間で発生した営業上の紛議は組合が仲裁、制裁措置を定めて円滑な商取引を促すほか、不正行為により店員を解雇したときは組合事務所に届け出、組合が他の組合員に周知することで、当該者の雇用を未然に防ぐ措置もこうじている。

兵庫県という一地方の書店を束ねる組合とはいえ、全国の書籍出版連合会や雑誌組合との連携があり、柏組長が代表を務める全国書籍雑誌商組合地方協会からの情報は、地元会員にとって、新鮮な情報だったろう。当時、組合が発行する「時報」がどのような記事を掲載していたか定かでないが、会員としては気になる情報にあふれていたと思われる。

柏組長、石丸・川瀬の両副組長は就任以来、三十周年をむかえるまでつとめているが、規約に則り、2年の任期満了時、組合員の無記名投票による再選で、公平性にも揺るぎのない組織だった。三十年史に寄せた尼崎の書店・岡山末次郎の声を紹介しておわりた

い。柏佐一郎氏は、人物手腕の卓越せる、清濁併せ呑むの雅量、その風貌の示すが如く、県組合長として多年の功労者たるに止まらず、中央機関に於ても亦重きをなす第一人者であること今更ら贅言を要せず、我組合史上特筆すべき組合長である。

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は5月10日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(神戸市景観政策課)西山昌樹・川口雄也、(兵庫県信用組合)常深雅子・仲川雅夫・山崎綾音・浅田康平・花畑良彦・岩原良、(㈱広島銀行)上田亜希子、(㈱トマト銀行)渡辺健雄、(㈱神明ホールディングス)松本祥世、(神明倉庫)藤尾憲弘・米澤彩香、(佐野運輸㈱)志賀俊之・北島幸宏、(大一産業㈱)山部浩、(㈱イエスプランニング)西晶子、(新光明飾㈱)中川俊・西村友博・篠原博明・大森真美子・清水康佑、(佐田野不動産㈱)佐田野宏之以上、23名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



編集後記

神戸駅近くの小さな広場にD51型の機関車が正座する。神戸駅の山側広場からも、浜側広場からもある。ちよつと東の方へ入り込んだところに位置しているからだ。機関車は以前から広場に居る構えていたが、車を運転する人の視覚上、交通障害になるとの理由から現在地へ移転した。高架下を行き来する車は、かなりあるが、徒歩の人には元町方面から神戸駅へ向かう人、帰る人のほか、目にすることは難しい位置関係にある。機関車治いの道を歩くとき、カメラを構える人によく出くわす。D51の人氣を証明する一幕だ。眠り続けてきた機関車だが、その存在を楽しんでもらう術はないか、JROBとともに、頭を悩ましてみようという方が現れた。今年は、東海道線開通百二十五年にあたる年という、D51が主人公になる日が楽しみ。

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 6月

◇元町1番街商店街振興組合 TEL331-7850

占い市 6月12日(水)12時～17時

水曜市 6月19日(水)11時～19時

◇元町6丁目商店街振興組合 TEL367-5477

モトロク市 6月1日(土)11時～17時

(毎月第1土曜日開催)

◇風月堂ホール(有料) TEL321-5555

もとまち寄席「愚雅亭」 6月10日(月)

桂 優々 桂 福矢 笑福亭生喬

露の 新治 桂 三風 桂 塩鍋

前売券は5月11日より風月堂で発売

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

2019年4月より休館中(改修工事の為)

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

6月1日(土)～6月7日(金)

『どこでもない、ここしかない』

『ハリウッド大作戦』

6月1日(土)～6月14日(金)『ワイルドツアー』

海という名の本屋が消えた（67）

平野義昌

がしんたれ・菊田一夫の神戸（3）

和吉は美也子とのデートで初めて宝塚少女歌劇を見た。美也子は和吉が退屈していると気遣い、上演途中で出る。二人は武庫川沿いの松林を歩いて、口げんかをしたり、次のデートを約束したり。和吉は歌劇より美也子と一緒にいることがうれしかった。

珍物屋の長女・田鶴子が歌劇団の音楽教師と交際していた。和吉は彼氏に手紙を届け、返事を預かってくるよう言いつかる。彼氏が褒美に歌劇を見せてくれた。洋楽、独唱と合唱、踊りの織り成す舞台に引き入れられた。菊田は自らの作品が宝塚歌劇の影響を受けたことを認めている。戦後、菊田は宝塚歌劇の脚本も手がける。

和吉は歌劇に感激し夢見心地、彼氏の手紙のことを忘れていた。その手紙を店主の目の前で落としてしまう。二人の交際が発覚し、引き離された。自由な恋愛が許される時代ではない。和吉の大失敗。後年、田鶴子の縁談が決まり、和吉は二人の別れに立ち会う。

1923(大正12)年春、神戸市青年団結成。元町商店街では町会ごとに組織されることになった。5丁目の会長は今井度量衡店・今井善兵衛。和吉は今井の推薦で青年会委員になった。和吉は文芸部だが一人だけなので、音楽部に編入された。音楽部長は走水神社隣の染物屋・紋彦の息子井上勘二郎(通称井ノ勘、マンドリン愛好)。「神戸全市の青年会員が集まるのやさかいな、何とかして元五青年会の存在を、パーアツと高らしめよやおまへんか」／と、元町五丁目町会事務所の二階で行われた何回目かの委員会の席上で言ったのは、いつもは、物尺とか秤とかを商って、今井商店の暗い店の奥にうずくまるようにしている今井善兵衛さんだった。今井さんの弟は画家である。のびのびと好きなことをして暮らす弟にひきかえ、三十すぎまで嫁を貰わず親の後を継いで商いに没頭している善兵衛さんの心のなかには、何か、鬱積したものがあったのであろう。》註1、補註

井ノ勘がブラスバンドを提案する。委員たちも2年前の川崎三菱デモの賑やかなブラスバンド行進を記憶していた。大きなラッパと賑やかな行進は見物者に大きなインパクトを与えた。井ノ勘は、他の青年団に音楽隊はないから異彩を放つこと間違いない、と意気込む。青年団は商店の若旦那や従業員たちだ。親世代の店主・旦那に若い力を誇示したい。しかし、資金は町会＝旦那から出る。ブラスバンドは認められたが、金額は希望の五分の一に削られた。銀笛10本・ホルネット1本・太太鼓・シンバル・小太鼓各1の鼓笛隊になった。元五鼓笛隊が行進の先頭を飾ることが決まった。和吉は銀笛。行進は4月第一水曜日、練習期間は20日ほどしかない。メンバーは店の仕事をほり出して練習に励んだ。

湊川公園での結成式の後、全青年団員が多聞通から元町通、生田神社まで行進した。先頭で井ノ勘が指揮棒を振る。「行列が元町五丁目にさしかかったとき、井ノ勘さんは、どこで習ってきたのか、銀色の指揮棒を軍楽隊の指揮者のように振りまわし、鼓笛隊はあらんかぎりの音で、神戸市青年団の歌を吹奏した。ところが和吉の銀笛は、あんまり息を強く吹きすぎたので、何かのゴミがつまっていたのか、元町六丁目から五丁目にはいるあたりで音が出なくなった。」註1

予算削減で安物の楽器だった。行進終了後、和吉は店の仕事より青年団音楽部の機関誌「桜草」編集に力が入る。町内で原稿を募集するが、小間物問屋の旦那の俳句と呉服店番頭の川柳のみ。和吉は井ノ勘さんと

各店の旦那、従業員を訪ねて原稿を依頼するが、集まらない。音楽部長・井ノ勘のメンツもある。和吉が評論「音楽と団結」、詩3篇、短歌10首を書いて体裁を整えた。和吉が謄写版を刷り、井ノ勘と配った。

珍物屋主人が今井会長に青年会の仕事を控えるよう苦情を申し入れた。和吉が店で謄写版を刷るのだが、根が不器用。商品や棚をインクで汚し、挿絵にするために色紙をなぞって台無しにしていた。一つに夢中になると他のことに気が行かない、和吉の欠点。今井に注意されるが、納得せず、井ノ勘に相談。井ノ勘は音楽部長として和吉に共感していた。

〈いずれにしても、和吉はきかなかった。表面は柔和で、旦那はんの言葉を「へえへえ」ときくのだが、実際には毎月一回は、狐つきみたいな顔をして「桜草」の原稿を書き、店中を謄写版のインクだらけにして「桜草」の印刷をやる。いつのまに、そんな表面だけ穏やかな、その実、内心は悪く気の強い少年になってしまったのだから、自分でも、その境目が分からない。》註1

和吉は、養母と音信不通、なかよしの重吉は感化院、正吉は部落解放運動に志願して、精神的に余裕がなかったのだろう。楽しみは、美也子に会うことと「桜草」だった。相変わらず「桜草」に原稿は集まらない。村上たつまなど会員以外にも原稿を依頼していた。24年(大正13年)春、和吉の文章、「丁稚や番頭というのは、旦那はんのドレイではおまへん」が役員たちの怒りに触れた。音楽部補助金が打ち切れ、『桜草』廃刊。和吉は過激な思想を述べたわけではなく、旦那を恐れて、詩も歌も文章も書かない若者たちに、それではいかん、と言いたかった。

和吉は美也子に店を辞めたい、と打ち明けた。商品を汚すことで気まづくなったが、同人誌の活動で叱られたことはない。詩のことを考えていて、お客に気づかず、注意されたことはある。辞めたいと思うのは、わがままかもしれない。和吉の心の中で、商人よりも文筆への思いが強くなっていったのだろう。それはそれ、和吉と美也子は互いを思う気持ちを告白し合った。

和吉は株屋の源さんにも相談した。源さんは和吉の文士志望を感じとっていた。和吉は東京の同人誌にも加入し、童話雑誌に投稿して賞をもらっていた。源さんは、親のない者が飯を食っていくことの難しさを説き、文士など無謀なことを考えず、商人としておとなしく暮らせ、と説得した。

この秋、和吉を落胆・絶望させる事件が起きる。人手不足のため月末の集金は市内広範囲を回らなければならない。自転車で新開地へ向かう途中、逆行してきた自転車と衝突し、はずみで荷馬車に巻き込まれ足を負傷。薬屋で応急処置をしてもらい、集金を続けた。店に電話を入れるべきだった。ケガの身で時間が効かる。日が暮れて、中山手の代議士豪邸に着くと、丁稚に金を渡すなどと電話があった、と門前払い。次の家でも同様だった。〈「旦那はんは、僕を信用してはらへんのやな」註1

珍物屋に勤めて6年、和吉の心は切れてしまった。翌25(大正14)年1月4日、和吉は店を辞め、東京に向かう。神戸駅で美也子が、偉くなって帰って来るまで待っている、と見送ってくれた。

和吉は印刷所で働き、詩作。人伝てに美也子の結婚を知る。同人仲間・林芙美子が和吉を慰め、諦めよ、と論じた。戦後、菊田が林の作品をプロデュースするのも因縁である。

昭和に入り、和吉は劇団脚本家の道に進む。興業先

の大阪や神戸で美也子に出会うが、声をかけ合うことはなかった。

〈……私は丁稚奉公を通じて、夜学を通じて、多くの人を知り、友を得て、本を読む事も覚え、詩をつくるすべを習い、恋を知ってそれを失ったが、十二歳から十八歳までの日々は、思えば、ほろにがく、また甘く、なつかしくも胸いたむ思いもある私の……神戸元町は、私の青春時代であった。》註2

菊田の初恋は実らなかったが、神戸生活は演劇界に大きな功績を残す基礎になった。

自伝小説「がしんたれ」は『週刊朝日』に連載、挿絵は小磯良平。初回、菊田の書き出しと小磯の絵は6丁目の瓦煎餅・亀井堂総本店の店頭風景だ。写真〈和吉が覚えているのは、その表構えに並んだ鉄格子の窓のことである。その中には瓦煎餅を焼く工場があった。／窓は、通りかかりの人にも興味をそそらせるように間口が広くとってあり、そこから、鉄格子越しに中を覗きこむと、炭火を真赤におこした炉が二列になって奥深くまで並び、その両側から三十人ばかりの職人が向かいあって、いつも瓦煎餅を焼いていた。〉註1

現在も亀井堂店頭には格子窓の面影が残されている。菊田は煎餅の焼ける匂いと職人の作業を見ることが楽しかった。

〈……店の使いで顧客先へ届け物をした帰りの時間を、よくその人寄せ窓の外でつぶしたが、杓子で掻き出された黄身つばいどろどろのタネが、二枚の鉄板を合わせたような煎餅焼器にはさまれ、真っ赤な火の上でこんがりと焼けてゆく匂いをかいていると、ことに、冬の寒い腹の減った日などは、その匂いをかいだだけで、なんだか幸福になったような気がしたものだ。》註1

鉄格子には長年の煙が染み付いて、夢中になって覗いていると、額に縦2本の線がつく。店に帰ると、それを証拠に番頭から叱られる。〈……番頭もまた、かつて、でぼちゃんに縦の二本の黒い筋を染めつけた子供だったのである。〉註1

註1 菊田一夫「がしんたれ」 角川文庫 1961年初出は『週刊朝日』1955年～56年。単行本は59年光文社から。
註2 菊田一夫「神戸元町の思い出」(『こべ元町100年』元町地域PR委員会、1971年所収)
補註 今井善兵衛の弟は本連載で何度か紹介した「赤マントの朝やん」こと今井朝路。



『週刊朝日』1958年5月11日号より

出来事ファイル（No.19－6）

■神戸市副市長に 油井洋明氏就任

昭和58年神戸市入庁、平成15年4月、北区まちづくり推進部まちづくり推進課長としてまちづくりにかわり平成17年4月、都市計画総局計画部主幹、20年4月には建設局に転じ、西部建設事務所副所長を経て22年4月、建設局中央水環境センター長、24年4月、都市計画総局計画部長、26年4月建設局道路部長から建設局長を経、31年4月、神戸市副市長に就任された。



■神受け神事

4月16日(火曜)元町通3丁目マサヤ(株)前で、恒例の生田祭神受け神事が行われた。今年の担当は東山地区。同地区の奉仕により各氏子地区を巡礼する元町地区での神受け神事は10時45分。一行はほぼ予定通りの時間にマサヤ前の会場に到着、集まった各丁の商店街役員や自治会関係者参列のもと、道行く人たちの目も集め日置春文宮司のにより、厳かに行われた。



□読者プレゼント

“明石市100年の日本画家”
今年の11月、市制施行100周年を迎える明石市は、その間、郷土作家たちが多彩な作品を生み出してきました。明石藩最後の儒学者・橋本海関から現代作家まで、明石に縁のある作家8名の作品をとりあげ、明石で生まれた日本画の世界を紹介する展覧会です。鑑賞ご希望の方は、住所、氏名、年齢、本紙へのひと言を添えて編集部まで、先着順で5組の方にペア招待券をお送りします。
期間：5月25日(土)～6月23日(日)
会場：明石市立文化博物館(078-918-5400)



寺島紫明「三人の舞妓」

■協和会館で健康サロン

海岸通4丁目の安原邦夫さんが主宰する「みなと元町健康サロン・すずらん」は、毎月同会館が4月から改装工事に入ったため、元町通3丁目の協和会館2階に変更、4月9日(火)、同会場で初めての健康サロンが開かれた。エレベーター設備のない会場だったが、例月通りの顔触れで体操を楽しんだ。



■新元号「令和」元町商店街に

天皇の退位により「平成」に代わる新しい元号として、万葉集から導き出された新元号「令和」が4月1日、決定した。新しい天皇のもと、5月1日から「令和」の時代がスタートする。元町商店街では、新しい時代のはじまりを祝い4月半ば、書の世界に縁の深い走水神社・児嶋英毅宮司に依頼「御代替奉祝 新元号 令和」を全丁に掲出、新しい時代のはじまりを祝福した。



■無縁佛五輪塔慰霊祭休止へ

昭和34(1959)年、下水工事のため元町商店街を掘り返した時、地下3～4米の土中から発掘された多数の五輪塔。さらに源平合戦時の将士の碑と桃山時代、花隈城主・荒木村重が織田信長に謀反して戦った時戦死した城兵らの墓が194基、これらの法要を営むため当時元町商店街連合会長だった鳥越静助氏が、古寺山八十八教会主・安藤弥市氏に合祀をお願いしたのを契機に毎年の参拝が始まった無縁佛五輪塔慰霊祭。平成11(1999)年4月には、墓地に祀られて40年にあたるのを記念して、松尾煌一(元町通5丁目商店街理事長・みなと元町タウン協議会監査役)が中心になり、加川勉氏の世話で、元町地域挙げての法要を開催、大型バスで60名が参加、法要を行っている。

八十八教会主により毎年おこなわれてきた法要も、第三代教会代表をつとめてこられた安藤輝幸氏も高齢化、後継者も見当たらず維持運営資金面でも存続を危ぶむ困難な状況から平成31(2019)年4月20日(土)、高野山 真言宗 武庫山 理性院 西蔵僧侶を迎え10時30分からの慰霊祭を最後とする旨の知らせを受け、元町商店街役員4名が法要に参列、今後の慰霊のあり方を探りながら帰路に就いた。

■神戸山手学園、濱名学院と合併

学校法人濱名学院(尼崎市潮江1丁目3-23、理事長 濱名篤)と学校法人神戸山手学園(神戸市中央区諏訪山町3-1、理事長 楠見清)は、2020年4月、法人合併することに同意、2019(平成31)年3月2日、兵庫県知事立会いの下兵庫県公館で、法人合併の調印を行った。2020年4月から「学校法人濱名山手学院」として、新しい歩みが始まる。

三「学校法人濱名山手学



左から濱名理事長・楠見理事長

■神戸東地区クリーン作戦

5月の神戸東地域クリーン作戦は長期連休期間に当たる為、変則的な作業になった。エスタシオン・デ・神戸は、従来、水曜を実施日としてきたが、仕事の関係から5月7日(火)に変更、従来通りのコースで、同社社員25名が協議会・奈良山会長とともにクリーン作戦を実施した。ネットヨタと元町通7丁目チームは、今回、実施を見送った。



左から畑芳弘・浜田紀雄・近藤裕重・蓮池國男さん